

國學院大學學術情報リポジトリ

茅盾と「マルクスの社会主義」：
アナトール・フランス評価、および『共産党』月刊
との関連から

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學 公開日: 2024-03-13 キーワード (Ja): 茅盾, 中国共産党, アナトール・フランス, コミンテルン, 『共産党』月刊 キーワード (En): 作成者: 白井, 重範, Shirai, Shigenori メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000191

茅盾と「マルクスの社会主義」

——アナトール・フランス評価、
および『共産党』月刊との関連から

白井重範

はじめに

中国共産党（以下「中共」）革命史観の相対化⁽¹⁾が進み、革命史に従属する文学史は説得力を失った。人民共和国成立を頂点とする中国革命への貢献や、「正しい」政治路線との距離が、もはや作家を評価する最重要項目でないことは明らかである。しかし、それは左翼作家の内在的研究が不要であることを意味しない。現実社会に対する彼らの認識と、その文学への表れは単純ではなく、個々の作家ごとに改めて検証される必要がある。

茅盾（1896-1981）は、中共創立⁽²⁾と同時に黨員となった58名の一人であり、1920年代前半は、商務印書館編集者の立場を利用して中共中央の連絡員をつとめ、第一次国共合作に際しては、上海の中共黨員を国民党に跨党加入させる責任者であった。広州と武漢の国民政府では、情報宣伝関連の要職⁽³⁾についている。その一方、20年代初頭には『小説月報』主編をつとめ、文学研究会の理論的指導者として、写実主義や「人生のための文学」を提唱するとともに、海外文学を翻訳紹介し、船出したばかりの中国近代文学の舵取り役を担った。国共分裂後は中共党籍を失うが⁽⁴⁾、国民革命の現実を描いた小説で「作家」⁽⁵⁾として再出発する。1927年から48年までに発表した小説は、中・長編15篇、短編55篇を数える。

中共創立以来の黨員という経歴は目を引くが、1920年頃の茅盾の思想、特にマルクス主義理解の様相は、十分に明らかになってはいない。茅盾自身は22年5月の講演で、次のように述べている。

私も思想変動という渦に巻き込まれた一人で、最初は私の心をなぐさめる
抛り所が見つけれず、やはり深い煩悶を感じていました。しかし、近ごろ
私は一本の路を見つけ、私の究極の希望を全てそこにかけることにしたので、
一切の煩悶は雲散霧消しました。それはどんな路でしょうか。それこそは、
私が「マルクスの社会主義」を確信したということなのです。⁽⁶⁾

思想変動とは、個人主義的理想を持つ若者が多く出現したことを指す。茅盾によれば、新文化運動の影響で、若者は旧来の社会制度に批判的な眼差しを向けたが、それは欲求不満の裏返しでもあった。新しき村、人道主義、アナキズムが彼らの心をとらえ、男女平等の意識は自由恋愛に発展したが、現実には理想通りに進まず「煩悶」が生じた⁽⁷⁾。茅盾は、煩悶を取り除く方法には「享楽」「反動」「主義の信奉」があり、最終的に「主義の信奉」のみが唯一の選択肢になると主張する。

青年は動的で、煩悶し続けることも、漫然と過ごすこともできません。精神を奮い起こし、彼らを煩悶させることのない、彼らの心に信徒のような拠り所を持たせる、新しい路を求めずにはいられません。要するに、彼らの煩悶を取り除くには、必ず相応の主義を胸に抱き、それを堅く信奉し、自分の一生の精力をこの目標に注入し、勇敢に前進するほかないのです。⁽⁸⁾

茅盾は「マルクスの社会主義」⁽⁹⁾の確信によって煩悶を脱し、どのような世界観を形成したのか。本稿では、茅盾が参照した一次資料⁽¹⁰⁾に当たりつつ、1920年代初頭の茅盾の思想状況⁽¹¹⁾に迫りたい。まず、フランスの文豪アナトール・フランスに対する評価から、茅盾の新たな一面を探る。その上で、地下雑誌『共産党』月刊に掲載された文章を手掛かりに、茅盾が確信したという「マルクスの社会主義」の内容を明らかにする。

1. 茅盾のアナトール・フランス評価

前述の講演で、茅盾はアナトール・フランスを次のように紹介した。

フランスは1921年にノーベル文学賞を受賞しました。彼は当初すべての政治思想に懐疑的で、過去、現在、未来の一切の社会に不満でした。〔中略〕彼は社会の外側に立とうとしましたが、人は社会の一員であって、社会と密接な関係にあり、離れることなどできません。〔中略〕彼は仕方なく社会問題を研究し、社会主義を信奉するようになりました。現在の発言全体に見られる思想からして、彼はすでに共産主義者のようです。⁽¹²⁾

1921年2月と翌年2月には、『小説月報』の「海外文壇消息」欄でフランスを取り上げている。21年の記事では、社会問題を語る文学者としてプラスコ・イバニェス、バーナード・ショー、アーノルド・ベネットとともにフランスを挙げ、次のように述べた。

フランスは勇敢な文学者、社会主義者であり、彼は流行の思想に挑戦し、

時代潮流の先を行く。〔中略〕欧州全土が戦勝の熱狂にわく今、欧州の命運が間もなく尽きると大声で呼びかける。彼はいう、「一つの民族のみが起死回生の靈薬を持つ——それはロシアだ！」と。彼の労農ロシアに対する態度は、パリの『ユマニテ』に宛てた手紙に、はっきりと表れている。彼はいう、「フランスを救い、欧州を救い、全世界を救う事業は、当面はプロレタリアートの肩にゆだねられている。ロシア労農政府のフランス人労働者に対する呼びかけは痛切で、恐るべきものである。……ロシアは新しく、かの国のみ将来に希望がある」と。⁽¹³⁾

『ユマニテ』に宛てた手紙は、20年8月14日の『ユマニテ』(*L'Humanité*)に掲載された“Appel au Prolétariat”⁽¹⁴⁾と思われるが、原文には「ロシアは新しく」以下の部分が見当たらない。茅盾は英米紙の書評欄⁽¹⁵⁾のほか、欧米のマルクス主義団体の刊行物⁽¹⁶⁾にもよく目を通していた。引用元はそれらの可能性が高いが、現時点では不明である。

一年後の記事では、ブランデス著『アナトール・フランス』⁽¹⁷⁾に基づいて、フランスの文学を二期に区分し、人類をはるか高みから眺める風刺者であった彼が、戦士、社会主義者に変貌したと述べた後、次のように続ける。

この勇氣はその後再び消滅し失望に変わった。『ペンギンの島』はその頃の産物である。大戦後彼はまた変化し、最近の言論思想からすると、彼は共産主義者のようだ。⁽¹⁸⁾

ブランデスが扱うのは「民主主義者で社会主義者」のフランスまでだが、茅盾は基本情報を同書に依拠し、その後の思想的変化を追加している。これは茅盾のフランス評の多くに共通する特徴である。

1924年1月から5月まで、鄭振鐸と連名で『小説月報』に連載した「現代世界文学者略伝」では、フランスを全40名中の筆頭にあげ、ドレフュス事件に関わって多くの恨みを買ったフランスが、『現代史』(1897-1901)に自らの化身ベルジュレ氏を登場させたこと、その後社会主義に接近し、大戦後は「マルクス派の共産主義者」になったことを記している⁽¹⁹⁾。

1924年10月、フランス逝去の報に接して、茅盾はすぐに追悼文を書く⁽²⁰⁾。同文は10月10日発行の『小説月報』、同13日発行の『文学週報』第143期に掲載された⁽²¹⁾。

追悼文で茅盾は、フランスには思想的変化が4回あったと述べる。第1期は優雅で善良で同情心に篤い詩人であり、初期作品は温かく甘い皮肉で人生の矛盾を解説した。第2期は皮肉が攻撃に変わり、まずは宗教、次に偏見と迷信に対して剣を抜いた。ドレフュス事件をきっかけに急進派となり、社会主義の賛成者から信奉者、さらには明らかな社会主義者になった。事件後、急進派が行き詰まると、

悲観的な虚無主義へと落ち込み、さすがの彼も歳をとったと思われたが、欧州大戦をきっかけに若さを取り戻す。ロシア革命成功の知らせがもたらされると、ソ連への共感を表明して共産党へ加入したとする⁽²²⁾。

追悼文は、後期の代表作である『神々は渴く』(1912)や『天使の反逆』(1914)について、傑作ではあるが「明らかな虚無主義の立場」⁽²³⁾とする。「正義」を狂信する革命家の不寛容を描いた『神々は渴く』を、茅盾は正当に評価できない。社会主義革命を扱った作品ではないが、「革命」に対する不信イコール「虚無主義」として、評価を減じているかに見える。その一方で、フランス革命の現実に厳しい評価を下したフランスが、ロシア革命を賛美し、共産主義に傾いた⁽²⁴⁾ 事実、茅盾にとって好ましいことであった。つまり、フランスの人生は「(共産)主義の信奉」の重要性を物語る好例にほかならない。

これまで見てきたように、茅盾のフランス評価においては、人物評価が作品評価を大きく上回っている。彼はフランス最晩年の思想的变化を重視し、それ以前の経歴や著作については、既存の評論をほぼ鵜呑みにしている。許鈞は、1920年代の中国はフランスの晩年の思想的变化を重視する傾向があり、西洋の読者がフランスの文学的営為を高く評価したのに対し、中国の紹介者はフランスの「社会的」イメージを強化し、「文学的」イメージを弱めたと指摘している。その例として茅盾による追悼文を取り上げ、次のように述べる。

沈雁冰にとって、フランスは偉大な文学者である以上に、偉大な思想家であった。もし文学に限ってフランスを評価するなら、フランスを深く理解することが難しくなる。そのため、追悼文全体で、沈雁冰はフランスの思想の変遷と発展の全面的な理解に重点を置いた。⁽²⁵⁾

沈雁冰とカールフェルト⁽²⁶⁾はいずれもフランスを高く評価するが、前者が強調するのはフランスの思想家のイメージであり、後者が賞賛するのは主にフランスの文学における「天才」である。[中略]革命家沈雁冰はフランス作品が包含する偉大な思想を重視し、ノーベル文学賞「受賞理由」の起草者が重視したのはフランスという偉大な文学者の輝かしい天才の輝きであった。⁽²⁷⁾

茅盾は文学者としてのフランスにはさほどの注意を払っておらず、フランスを「深く」「全面的」に理解しようとしたのかは疑問である。許鈞の言葉を借りるなら、茅盾は「革命家」として、フランスの思想の変遷を共産主義の宣伝に利用している。

世界の社会主義諸派にとっても、フランスの共産主義接近は小さくない事件であった。ロシア・ソヴィエト・ビューロー(RSGB)が発行する『ソヴィエト・ロシア』(*Soviet Russia*) 1921年4月2日号は、“The Crime of Anatole France”という文

章⁽²⁸⁾を掲載した。これはドイツ共産党の機関紙『ローテ・ファーネ』(*Rote Fahne*)に載った記事の英訳で、題名はフランスの出世作『シルヴェストル・ボナールの罪』(1881)にかけたものである。アナキスト系の『フライハイ特』(*Freiheit*)、社会民主党の『フォアヴェルツ』(*Vorwärts*)、全ドイツ連盟の『ドイチュ・ツァイトウング』(*Deutsche Zeitung*)の3紙が、共産党員となったフランスを揶揄する内容を紹介しており、『ドイチュ・ツァイトウング』がフランスを「実はユダヤ人だった」「化けの皮が剥がれた」といって嘲笑するのは論外として、『フライハイ特』はフランスが共産主義インターナショナル(コミンテルン)執行委員会議長ジノヴィエフの使者に脅されて入党申請書にサインする場面を創作し、『フォアヴェルツ』はフランスが老いていかに毫碌したかを描いた。茅盾は次のように述べる。

我々はこうしたくだらない論調を見、欧州の黄色知識階級がフランスを恐れ、彼個人の共産党加入に対し、おおげさに話をでっち上げて罵倒することも厭わないのを目にすれば、フランスが欧州思想界でどれほど重要な位置を占めているかわかる。⁽²⁹⁾

同時代最高の知性が共産主義の側についたことは、共産主義者にとっては快哉を叫ぶべき出来事である。ノーベル文学賞受賞もほぼ同時期のことであり、晩年のフランスは、当時の共産主義の攻勢を象徴する人物となった。茅盾によるフランスの政治利用も、当時の中共党員としては当然の行為であった。

フランス本人の共産主義への接近自体が、1919年3月のコミンテルン成立以降の国際的動向と無関係ではない。第一次大戦の反省、第二インターナショナルの崩壊によって、社会民主主義への不信感が醸成され、1919年春から翌年夏にかけては、レーニンの掲げた楽観的な国際革命論が一定のリアリティを持った時期であった。中共の成立も、この世界的な潮流の中に位置づけることができる。

2. 『共産党』月刊とアメリカ共産党関連文書

1920年、ロシア共産党極東ビューローのヴォイチンスキーがコミンテルン代表として訪中、4月に北京で李大釗と、5月に上海で陳独秀と面会し、中共の設立を提言した⁽³⁰⁾。まもなく上海マルクス主義研究会が結成され、これを母体として8月に上海共産主義グループが成立する。茅盾は10月に、李漢俊の紹介で同グループに加入した⁽³¹⁾。

茅盾は、同グループが1920年11月に創刊した雑誌『共産党』月刊に関与し、第2号に「共産主義是什麼意思」「美国共産党宣言」「美国共産党綱」「共産党国際聯盟对美国I.W.W.的懇請」の4篇⁽³²⁾を翻訳した。回想録では次のように述べる。

これらの翻訳活動を通じて、私は共産主義が何か、共産党の綱領や内部組織がどうなっているか、初歩的に理解した。特に「美国共産党宣言」はマルクス主義理論とそのプロレタリア革命実践への応用に関する簡要な論文であり、資本主義の破綻、帝国主義、戦争と革命、階級闘争、選挙競争、群衆工作、プロレタリア独裁、共産主義社会の改造などについて述べていた。⁽³³⁾

当時のアメリカ共産党 (CPA) は過渡的な組織であり、1919年に社会党 (SPA) から脱退した左派が共産主義労働者党 (CLP) と CPA に分裂、その後21年に統合され、30年に名称を現在のアメリカ共産党 (CPUSA) に改める。統合までの間、両派はコミンテルンの支持を得るべく主導権争いを繰り返した。実際はCLPとCPAの主張に明確な相違はなく、対立は構成員の出自 (東欧移民中心のCPA、アメリカ社会に根付いたCLP) や、リーダー間の諍いを原因としたものだったという⁽³⁴⁾。

矛盾詭「美国共産党宣言」の原典としてまず疑われるのはCPAのマニフェストだが、CPA発行の*Manifesto and program. Constitution. Report to the Communist International*⁽³⁵⁾とは内容が一致しない。「美国共産党宣言」の原典は“Program of the United Communist Party of America”⁽³⁶⁾で、これは統一アメリカ共産党 (UCP) の起草によるものである。UCPは、1920年5月にCPAから英語話者を中心とする少数派が脱退しCLPに合流したもので⁽³⁷⁾、アメリカ共産党の統一はその後UCPを中心に進み、脱退組の中心人物C.E.ルーテンバーグが後にCPUSA初代書記長となる。コミンテルンは19年からCLPとCPAの合併を求めており、UCPの成立はコミンテルンの意向に沿うものであった。20年1月には、ジノヴィエフが即時統一を求める書簡を両党に送っており⁽³⁸⁾、UCP成立後の20年8月には、統一に加わらなかった党も早急に合流するよう、コミンテルン執行委員会による決議がなされている⁽³⁹⁾。

「美国共産党党綱」は“Constitution of the United Communist Party of America”⁽⁴⁰⁾の全訳で、原題からわかるようにUCPの規約である。上述の“Program of the United Communist Party of America”と同じくUCP成立大会で採択され、『コミュニスト』Vol.1 No.1⁽⁴¹⁾に掲載された。

「共産主義は什麼意思」の原題は“What Communism Means !”, 副題に“Proclamation by the Central Executive Committee of the Communist Party of America”とあるように、CPAがルーテンバーグ脱退前の1920年2月に出したリーフレットである⁽⁴²⁾。矛盾は副題を「美国共産党中央執行委員会宣布」とそのまま訳したが、「アメリカ共産党」が分裂状態にあることには触れていない。

「共産党国際聯盟对美国I.W.W.的懇請」は、“The Communist International to the I.W.W. : An Appeal of the Executive Committee of the Third International at Moscow”⁽⁴³⁾もしくは“To the I.W.W. : A Special Message from the Communist

International”⁽⁴⁴⁾という名で知られる文書である。これはジノヴィエフの1920年1月付署名が入ったIWW（世界産業労働者組合）への公開書簡であり、直接行動による労働者の解放や国家の廃止を主張するIWWに対して、資本主義国家を倒し、プロレタリア独裁を確立することを当面の目標とする意義を述べたものである。国家を廃止しても資本家は残り、彼らによる支配を消滅させるには、資本家とその協力者の排除が不可欠だとして、次のように述べている。

資本主義国家を打ち倒し、資本家の反撃を粉碎し⁽⁴⁵⁾、資本階級の武装を解除し、資本家の財産を没収して、全労働者階級の共同の管理下に置く、——この大量の仕事を行うには、どうしても政府が、国家が必要である。その国家こそプロレタリアートの独裁国家であり、この国家で、労働者たちはソヴィエトを通じ、資本制度の根を鉄の手で抜き去ることができる。⁽⁴⁶⁾

そして、「プロレタリアート独裁も一時的なものに過ぎず、我々共産党も国家の廃止を望んでいる」とし、IWW指導者に共産党への加入を促す。一読してわかるように、この文書もアメリカにおける統一共産党結成に向けた働きかけの一環であった。

コミンテルンは創立当初労働組合を軽視していたが、1919年7月に社会民主主義的な国際労働組合連盟（IFTU）が再建され、これに対抗すべく赤色労働組合インターナショナル（プロフィンテルン）を創設した。その際に左翼労働組合の新設ではなく、既存の労働組合内部での多数派形成をはかる戦術が採用された⁽⁴⁷⁾。“To the I.W.W.”は、戦闘的サンディカリストが大衆と結びつき、多数派を形成する重要性を説いたものとして理解すべきだが⁽⁴⁸⁾、戦闘的サンディカリストがいまだ存在しない中国⁽⁴⁹⁾においては、単にポリシェヴィズムの優位性を主張したものとして認識された可能性もあろう。

なお、茅盾は『解放與改造』第2巻第7～9号（1920年4月1日、15日、5月1日）に、労働運動史研究者P.F.プリッセンデンの学位論文*The I.W.W. : A Study of American Syndicalism*⁽⁵⁰⁾の要約と解説⁽⁵¹⁾を連載している。同書はIWWに関する同時代的な研究として最も詳しく、IWW成立の経過（第1部）、IWW第1回大会以降の活動（第2部）、IWWシカゴのアナルコ・サンディカリストに関する分析（第3部）からなる。茅盾の解説は第3部を中心としたかなり詳細なものであり、彼がIWWおよびサンディカリズムについて、事前に相当の知識を有していたことは押さえておきたい。

さて、これらアメリカ共産党関連文書の翻訳は、『共産党』主編であった李達への依頼に応えたものとされる⁽⁵²⁾が、原典の選定基準などは明らかでない。『共産党』は「専ら共産党の理論と実践、およびコミンテルンやソ連、各国の労働運動のニュースを宣伝し紹介する」ために創刊され⁽⁵³⁾、アメリカ共産党をめぐる情勢

が複雑をきわめる中、茅盾の翻訳した文書は当時のコミンテルン方針に沿うものに限られていた。第2号までの出版費用はヴォイチンスキーから出ており⁽⁵⁴⁾、発行自体がコミンテルンの指示であった可能性は高い。文書の選定に茅盾の意向が働いたことは考えにくい、むしろ受動的であったことに意味があると思ふべきだろう。コミンテルンのお墨付きを与えられた文書の翻訳を通じ、茅盾はこの時点における「正統」な理論として、ボリシェヴィズムを受け入れることになった。

石川禎浩は、茅盾の翻訳が上海の共産主義運動に与えた影響について、次のように述べている。

ボリシェヴィズムの影響をいちやく受け、「プロレタリア独裁」「政治運動」を強調するにいたったアメリカ共産党の規約、綱領の精神は、翻訳を通じ、上海の共産主義運動をマルクス主義学説の研究から、レーニン流の運動論、組織論の摂取へと変えていったのであった。⁽⁵⁵⁾

『共産党』に翻訳掲載された文書は「レーニン流の運動論、組織論」に偏重しており、上海共産主義グループの運動方針に影響を与えた。そして茅盾は、「マルクスの社会主義」をそのようなものとして、つまり初めから「レーニン流の運動論」として受容したのではないかと考えられる。

茅盾はアナキズムやサンディカリズム、ギルド社会主義にも関心を寄せていた⁽⁵⁶⁾。1919年から翌年10月頃まで、茅盾は『時事新報』副刊『学燈』および『解放與改造』主編の張東蓀と親しく、張の依頼に応える形で広義の社会主義関連の文章を紹介した。茅盾はバートランド・ラッセルの『自由への道』(1918)から、アナキズムを扱った第2章⁽⁵⁷⁾および社会主義社会の科学と芸術について述べた第7章⁽⁵⁸⁾を翻訳し、『自由への道』全体も要約した上で詳細な解説をつけている⁽⁵⁹⁾。ラッセルの著作のほか、前掲の*The I. W. W. : a study of American syndicalism*も張東蓀から借り受け、要約と解説を執筆した。当時最先端の英語文献を精読しながら要約を作成し、適宜解説を加えるという作業は、社会主義思潮全般に対する丹念な検討と理解を促したはずである。しかし、20年10～11月頃、茅盾は張東蓀と袂を分かち⁽⁶⁰⁾。それはつまり、上海共産主義グループを通じて、茅盾が間接的にコミンテルンの指導を受ける状況が生じたということである。

3. 茅盾とボリシェヴィズム

『共産党』第3号に掲載された論文「自治運動與社会革命」は、「翻訳を通して共産主義の初歩的な知識を得」⁽⁶¹⁾て、ボリシェヴィズムを信奉するようになった茅盾自身の主張である。「自治運動」は連省自治、つまり「軍閥が権力を擁する中国各省において、1920年から1924年にかけて、政治的民主化によって、軍閥

の権力を解体し、中国を連邦制国家として再建しようという運動」⁽⁶²⁾である。茅盾はこれを「縉紳」階級の運動とみなし、彼らは本質的に軍閥と変わらず、やはり平民からの収奪を行うはずだと述べる。「縉紳」は官職をもつ紳士のことだが、文中では西洋の「第三階級」（第三身分）とほぼ同一視され、中国における市民階級（ブルジョワジー）といったニュアンスで使われている。

この文章では、ヨーロッパにおける市民革命について、第三階級が第四階級をそそのかし、自らの野心のために利用したものと説明される。

第三階級は野心を起し、専制君主の政権を奪おうとするが、自ら出撃する危険を冒したくないため、第四階級を手なづけ、専制皇帝を追い払った暁には国内の事柄を共に管理しようと甘言を弄する。忠実で勇敢な第四階級はこれら甘言を信じ、死力をふり絞って専制皇帝を追い出すが、専制皇帝が去った後、第三階級は狡猾な手段で政権を奪い取り、代議政治などというものを打ち立て、平民を愚弄する。平民は彼らの罠にはまり、彼らの言いなりになっただま、騙されたことに気づかない。第三階級はさらに金銭を丸ごと懐に入れ、第四階級に経済力を持たせず、さらに第四階級のうちの一部の貧者を鍛え上げ編成して兵士とし、自分を守らせると同時に、彼らに同じ階級の強情で収奪に応じない者を抑圧させる。⁽⁶³⁾

茅盾は市民革命を第三階級による政権の篡奪として理解し、中国における「縉紳」階級の運動もそれと同質のものであるとみなす。その上で、プロレタリアート独裁、プロレタリア革命の即時実行を主張するのである。

これまで世人を長く欺いてきたが、もう騙すことはできない！我々はすでにそのからくりを見破り、抵抗する良い方法を知っている。〔中略〕その方法こそは、第四階級（プロレタリアート）の独裁である。⁽⁶⁴⁾

我々は縉紳運動に軍閥を追い払うことなどではしないと断言するし、縉紳運動の結果は平民に一層大きな負担を強い、一層悲惨な状態にすると確信する。ならば、目の状況をどうすべきか明白だろう！／それがプロレタリア革命だ！即刻プロレタリア革命を実行するのだ！⁽⁶⁵⁾

プロレタリア革命を即刻実行すべきだという主張⁽⁶⁶⁾は、茅盾のこの文章に限ったものでない。『共産党』第2号に載った江春(李達)「社会革命底商榷」も、中国の現状について、「工業では、中国は現在すでに産業革命期」であり、「中国の労資両階級の対立は、表面上欧米や日本と異なるが、実際は何も変わらない」とし、革命の機は熟したと分析している⁽⁶⁷⁾。最初期の中国マルクス主義者の現実認識

が浅いのは無理からぬことだが、少し前に広義の社会主義文献と格闘していた茅盾が機械的な階級還元論を力説することには、いささか唐突な印象を受ける。

レーニンの規定では、「国家は、権力の特殊な組織であり、ある階級を抑圧するための暴力装置である」⁽⁶⁸⁾。ブルジョア国家は「結局のところ、かならずブルジョアジーの独裁」⁽⁶⁹⁾なのであって、「階級闘争の承認をプロレタリアートの独裁の承認までひろげる人だけが、マルクス主義者」⁽⁷⁰⁾ということになる。茅盾の主張は、プロレタリアート独裁の実現を最優先とするレーニン流の国家論を機械的に中国へ適用したにすぎないが、それは彼の怠慢ではない。「経典的著作」⁽⁷¹⁾は内容を吟味し、必要に応じて疑問を呈するようなものではなく、そのまま受け入れるべきなのである。

同じ『共産党』第3号は、訳者不詳の「加入第三次国際大会的条件」も掲載している。これは『ネーション』1920年10月13日号に載った“The Conditions of the Third Internationale”⁽⁷²⁾の翻訳で、石川禎浩はこの文書の訳者も茅盾だと推定しているようである⁽⁷³⁾。

「共産主義インタナショナルへの加入条件」⁽⁷⁴⁾は通常21ヶ条だが、『ネーション』版は22ヶ条からなる⁽⁷⁵⁾。『ネーション』版には8月25日付『フライハイト』と9月2日付『プレティン・コミュニスト』⁽⁷⁶⁾ (*Bulletin Communiste*) に依拠したとの説明があるが、後者原本には「加入条件」の掲載が確認できない⁽⁷⁷⁾。内容に若干の混乱は認められるが、ここで重要なのは「加入条件」自体の持った意味である。

「加入条件」が可決したのは、1920年7月から8月にかけて開催されたコミンテルン第2回大会である。大会の直前、イギリス独立労働党やイタリア社会党における中間派、改良主義者の主張を否定する必要が生じ、「加入条件」の審議が急遽議事に組み入れられた⁽⁷⁸⁾。第二インターナショナルも体制を立て直し、レーニンの楽観的な世界革命構想は頓挫しつつあった。19年3月の第1回大会ではやや拙速にコミンテルン創設を宣言した⁽⁷⁹⁾こともあり、第2回大会以降、改めて共産主義者を各国の共産党(コミンテルン支部)に所属させ、コミンテルンの一元的指導下に置くことが目指された。

「加入条件」は、各国の共産主義団体に対する一種の踏み絵となった。ドイツでは20年10月に独立社会民主党(USPD)左派がドイツ共産党(KPD)に加盟し、フランスでは20年12月に社会党(SFIO)の多数派がコミンテルン加盟を表明し、フランス共産党⁽⁸⁰⁾ (SFIC)が成立する。イタリアでは社会党(PSI)が分裂し、21年1月にイタリア共産党(PCI)が成立している。

中共はこのタイミングで結党準備を進めており、「加入条件」の遵守はその前提条件であったといえる。社会主義運動の蓄積がなく、欧米のような混乱は見られなかったものの、第7条で「改良主義」的傾向をもつ(張東蓀のような)人物との「絶縁」が謳われ、「黨員」には中央集権的な「鉄の規律」の遵守が義務付けられた。第21条にはコミンテルンの提示する「条件やテーゼを原則的に拒否する」者の排除

が明記されている。共産党員は改良主義や社会民主主義と絶縁し、ソヴィエト共和国を全面的に支持する義務を負った。中国革命は世界革命の一部となり、初期の中共はコミンテルンの指導に従うことを承認したのである⁽⁸¹⁾。やがて国民革命において、中共はコミンテルンの矛盾した中国政策に振り回され⁽⁸²⁾、多大な犠牲を払うことになる。

許紀霖は、中国知識人の「主義」が、1919年に社会改革の科学的方法論としての「知識化主義」と、危機を抜本的に解決しようとする「信仰化主義」に分化したと述べる⁽⁸³⁾。「信仰化主義」は、共有する目標や価値観の無謬性を前提とし、そこに疑いを挟むことはない。さらに「信仰化主義」は、アナキズムや社会主義のように並立可能な「柔性化主義」と、一元的な「剛性化主義」に分かれる。許紀霖はまた、初期の中国共産主義者は社会民主主義とレーニン主義を並立した「輻輳的マルクス主義」(柔性化主義)を受容し、20年代末に至って一元的レーニン主義(剛性化主義)を承認したとする⁽⁸⁴⁾。

1920年代中国の思想史をたどるなら、概ね許紀霖の理解の通りであろう。しかし、上海共産主義グループが拠り所とし、最初期の中共に持ち込んだのは、社会民主主義を排除した「剛性化主義」としてのレーニン主義である。茅盾が翻訳を通して受容したのも、一元的レーニン主義にほかならない。

おわりに

茅盾が20年代初頭に確信したという「マルクスの社会主義」は、レーニン流のマルクス主義、ポリシェヴィズムのことであった。1919年秋頃から始まる広義の社会主義関連文献の研究と、20年10月以降の上海共産主義グループにおける活動の間には断絶があり、茅盾はアメリカ共産党関連文書の翻訳を経て、意識的にポリシェヴィズムを選択したと考えられる。

ポリシェヴィズムは頭で理解するものではない。コミンテルン第2回大会以降、共産党員には党中央への忠誠とコミンテルンに対する無条件の依存と献身が要求された⁽⁸⁵⁾。「心に信徒のような拠り所」⁽⁸⁶⁾を持ち、上級組織の指導に自発的に従うマインドセットは、まさに「信仰」と呼ぶにふさわしい。なお、中国語の「信仰」はある概念を「信じる」「信奉する」ことであり、宗教的ニュアンスに限らない⁽⁸⁷⁾。一方、茅盾は「マルクスの社会主義」について、より語気を強めた「確信」を使用しており、これは対象の無謬性や絶対性が前提となっているように思われる。

ラッセルは、第一次大戦後の幻滅と絶望が、ポリシェヴィズムという「新しい宗教」を誕生させたと述べる。

それは素晴らしいこと——貧富という不正の終わり、経済的隷従の終わり、戦争の終わりを約束する。政治生活に毒を流し、産業体制を破壊させかねな

い階級間の分裂の終わりを約束する。商業主義——すべてのものを金銭的価値で評価させ、そして金銭的価値をしばしば怠けものの富豪たちの気紛れで決定させるよう仕向けていくあの巧妙な虚偽の終わりを約束する。すべての男女が労働によって健全に暮し、すべての労働が少数の富裕な吸血鬼のためだけでなく社会全体にとって価値があるような世界を約束する。それは、無関心と悲観論と倦怠、その複雑な悲惨さのすべてを一掃しようとする。⁽⁸⁸⁾

ポリシェヴィズムという「宗教」が約束するものは「素晴らし」く、アナトール・フランスの共産主義接近も、これらの「約束」が当時大きな現実味を帯びたことを示している。しかし、そのために動員されるのは資本家への憎悪であり、憎悪によってかきたてられるのは破壊願望である。ポリシェヴィズムの当然の帰結として、新たな善の建設より、旧悪の打倒こそが常に優先される⁽⁸⁹⁾。早くも1920年の段階で、ラッセルはこれらを看破していた。帝国主義、ポリシェヴィズムおよびYMCAなどには共通して「機械主義的」な、「人間を、科学的操作によってわれわれの空想にピッタリ合うようなどんな型にもはめこめる素材と、みなす考え方」があり⁽⁹⁰⁾、ラッセルは中国の若き知識人がこれらを摂取する危険性を訴えていた。前章で見た「自治運動與社会革命」には、実際にそのような傾向が認められる。同文は、茅盾のポリシェヴィズム受容の痕跡を留める貴重な資料というべきであろう。

茅盾には、率先してポリシェヴィズムを受け入れた時期が確かにあった。しかし、第一次国共合作の破綻を経て、彼は「幻滅」と「矛盾」を胸に革命工作から離脱することになる。筆者は、茅盾は結果的にポリシェヴィズムを血肉化できず、「革命家」になりそこねたのではないか、そのことが彼の「作家」への転身と、強いリアリズム志向につながっていくのではないかと考えている。1920年代初頭における「マルクスの社会主義」は、裏を返せば、前途に待ち受ける艱難辛苦を知らぬ茅盾の若さによって支えられていたということができるよう思う。

注

- (1) 歴史学における革命史観克服の現状は、河野正「中華人民共和国初期、農村社会史研究の現状と課題—「革命史観」はいかに克服されたのか—」(『社会科学研究』70巻2号、2019年3月) 参照。
- (2) 成立は1921年7月の中共第1回大会とするのが通例だが、石川禎浩は事実上の成立を「中国共産党宣言」が起草され、「共産党」月刊が創刊された1920年11月としている。石川禎浩『中国共産党成立史』(岩波書店、2001年、オンデマンド版2015年) 235頁。
- (3) 武漢時代は『漢口民国日報』主編をつとめ、いわゆる白色テロに関する報道の中心に身を置いた。
- (4) 1927年夏の武漢清党後、武装蜂起に加わらず失踪したことが主な理由と考えられている。31年と40年に復党の意思を表明した形跡はあるが、生前は認められなかった。欧家斤『茅

盾評説』（学林出版社、1997年）12-15頁。

- (5) 拙著『作家』茅盾論——二十世紀中国小説の世界認識（汲古書院、2013年）では、創作者の目で世界を把握する「作家」としての有り様に重点を置き、茅盾像の脱政治化を試みた。
- (6) 1922年5月4日、交通大学上海学校学生会五四記念講演会における講演。沈雁冰「五四運動與青年們底思想」(『民国日報・覚悟』1922年5月11日)『茅盾全集』14巻(黄山書社、2014年)393-394頁。
- (7) 前掲「五四運動與青年們底思想」『茅盾全集』14巻390-391頁。
- (8) 前掲「五四運動與青年們底思想」『茅盾全集』14巻393頁。
- (9) 「マルクスの社会主義」はやや奇妙な言葉だが、本稿ではこれをマルクス主義そのものとは区別し、当時の茅盾が理解したマルクス主義という意味でとらえる。なお、白水紀子「沈雁冰（茅盾）の社会思想——五四時代」(『中哲文学会報』8号、1983年6月)は、これを「マルクス主義の社会主義」と訳している。
- (10) 欧米の資料は、次のWebアーカイブを利用する。インターネット・アーカイブ(<https://archive.org>) [IA]、マルキスト・インターネット・アーカイブ(<https://www.marxists.org>) [MIA]、フランス国立図書館電子版(<https://gallica.bnf.fr>) [ガリカ]。URLは短縮表示する。
- (11) 前掲「沈雁冰（茅盾）の社会思想——五四時代」は五四時期の茅盾の思想状況を詳細に論じたが、当時の資料的制約の影響を被り、未検討の文章が多い。李広徳「論茅盾的政治観——茅盾的文化観之一」(『湖州師專学報』1996年3期)は、茅盾の主張の思想的な揺れを想定していない。
- (12) 前掲「五四運動與青年們底思想」『茅盾全集』14巻394頁。
- (13) 沈雁冰「文学家与社会問題（海外文壇消息8）」(『小説月報』12巻2号、1921年2月10日)『茅盾全集』31巻(黄山書社、2014年)12-13頁。
- (14) <https://bit.ly/3BhsxKi> [ガリカ]。
- (15) 情報源は*Times Literary Supplement*や*The New York Times Book Review*が知られる。茅盾『我走過的道路』上冊（三聯書店香港分店、1981年）142頁。
- (16) 後述の*Soviet Russia*や、イギリス共産党の*The Labour monthly*など。
- (17) Brandes, Georg. *Anatole France*. London: William Heinemann.1908. 同書24-25頁に茅盾の参照箇所が確認できる (<https://bit.ly/3AqQFbD>) [IA]。陳小航（羅稷南）による抄訳「布蘭兌斯的法朗士論」(『小説月報』13巻5号、1922年5月10日)がある。
- (18) 沈雁冰「去年（一九二一）諾貝爾文学賞金の得者（海外文壇消息113）」(『小説月報』13巻2号、1922年2月10日)『茅盾全集』31巻167頁。
- (19) 前掲『茅盾全集』31巻553頁。
- (20) 追悼文冒頭「ロイターが10月7日に訃報を伝えた」とあるが、実際の逝去は12日である。
- (21) 雁冰「法朗士逝矣！」(『小説月報』15巻10号、1924年10月10日)『茅盾全集』33巻(黄山書社、2014年)所収。『全集』は『文学週報』版に倣い、題名を「法朗士逝了！」とする。
- (22) 前掲「法朗士逝了！」『茅盾全集』33巻126-129頁。
- (23) 前掲「法朗士逝了！」『茅盾全集』33巻128頁。
- (24) ドレフュス事件を契機に結成された人権同盟と両立しないとして、フランスは実際には共産党に加入していない。三浦信孝「ドレフュス派作家の反革命小説か？——アナトール・フランス『神々は渴く』」（三浦信孝ほか編『作家たちのフランス革命』白水社、2022年）138-139頁。
- (25) 許鈞「法朗士在中国的翻譯接受与形象塑像」(『外国文学研究』2007年2期)121頁。
- (26) スウェーデンの詩人。1921年12月10日、スウェーデン・アカデミー事務局長として、フランスのノーベル文学賞贈呈式で受賞理由を述べた。

- (27) 前掲「法朗士在中国的翻訳接受与形象塑像」122頁。
- (28) 〈<https://bit.ly/3BtqLEW>〉〔IA〕。
- (29) 前掲「法郎士逝了！」『茅盾全集』33巻130頁。
- (30) 中国共産党編年史編委会『中国共産党編年史』1巻（山西人民出版社・中共党史出版社、2002年）71頁。
- (31) 前掲『我走過的道路』上冊153頁。
- (32) いずれもP生訳、『共産党』2号、1920年12月7日。前掲『茅盾訳文全集』9巻（知識産権出版社、2005年）所収。
- (33) 前掲『我走過的道路』上冊153-154頁。
- (34) Zumoff, Jacob. *The Communist International and US Communism, 1919-1929*. Brill. 2014. pp.40-41.
- (35) Communist Party of America. *Manifesto and program. Constitution. Report to the Communist International*. 1919. 〈<https://bit.ly/3wjib9Z>〉〔IA〕
- (36) 1920年5月26日から31日にかけて、ミシガン州ブリッジマンにおける成立大会で採択、*The Communist*, Vol.1 No.1 (1920年6月12日) 8-16面に掲載（<https://bit.ly/3QKAu03>）〔MIA〕。
- (37) Zumoff, Jacob, *op.cit.*, pp.42-43.
- (38) 山内昭人「初期コミンテルンとアムステルダム・ニューヨーク・メキシコシティ(下)」(『史淵』146号、2009年3月) 102-104頁。Zumoff, Jacob, *op.cit.*, p.44.
- (39) 前掲「初期コミンテルンとアムステルダム・ニューヨーク・メキシコシティ(下)」105頁。
- (40) 〈<https://bit.ly/3PItorz>〉〔MIA〕。
- (41) *The Communist*は元CPA機関紙で、USP成立後改めてVol.1 No.1から発行。
- (42) 〈<https://bit.ly/3POxdLF>〉〔MIA〕。
- (43) *The One Big Union Monthly*, 1920-09 : Volume 2, Issue 9, pp.26-30. 〈<https://bit.ly/3JxMbFT>〉〔IA〕。石川禎浩は、この文書の初出を*The Solidarity* 1920年8月14日号とする。前掲『中国共産党成立史』360頁。
- (44) こちらはIWWの指導者であり、CPAの創設にも関わったトム・グリンの序文を付して、メルボルンで発行されたものをテキスト化している。〈<https://bit.ly/3pLloc0>〉〔MIA〕。
- (45) 茅盾訳は“破壊資本家的帮手”だが、英語原文は“to crush capitalist resistance”。
- (46) 前掲『茅盾訳文全集』9巻162-163頁。
- (47) 前掲「初期コミンテルンとアムステルダム・ニューヨーク・メキシコシティ(下)」106頁。
- (48) 中林賢二郎『世界労働運動の歴史』上（労働旬報社、1965年）213頁。
- (49) 茅盾は、中国の同業組合(同行会)では規則や首領の権威が強く、労働運動は不可能とする一方、労働運動団体の新設より既存の同業組合を改革する方がよいと述べた。雁冰「組織労働運動団体的我見」(『解放與改造』2巻11号、1920年6月1日)『茅盾全集』14巻所収。
- (50) Brissenden, Paul Frederick. *The I. W. W. : a study of American syndicalism*, Columbia University. 1919. 〈<https://bit.ly/3KYFDzn>〉〔IA〕。
- (51) 勃烈生頓「I.W.W.的研究」(雁冰編訳、『解放與改造』2巻7-9号、1920年4月1日、15日、5月1日)『茅盾訳文全集』9巻所収。
- (52) 前掲『我走過的道路』上冊153頁。
- (53) 前掲『我走過的道路』上冊153頁。
- (54) 梅興無「『共産党』月刊創辦的前前後後」(『党史博採』2022年4期) 65頁。
- (55) 前掲『中国共産党成立史』80頁。
- (56) 白水紀子は、茅盾が当初心惹かれたのはクロボトキンの相互扶助説であり、平等への志向

- からアナキズムに共鳴していたと述べる。前掲「沈雁冰（茅盾）の社会思想——五四時代」124-128頁。
- (57) 雁冰「巴苦寧和無強権主義」（『東方雑誌』17巻1-2号、1920年1月10日、25日）『茅盾訳文全集』9巻所収。
- (58) 雁冰「社会主義下的科学與芸術」（『解放與改造』1巻8号、1919年12月15日）『茅盾訳文全集』8巻（知識産権出版社、2005年）所収。
- (59) 雁冰「羅塞爾『到自由的幾条擬徑』」（『解放與改造』1巻7号、1919年12月1日）『茅盾全集』14巻所収。
- (60) 張東蓀「由内地旅行而得之又一教訓」（『時事新報』1920年11月6日）は、社会主義との絶縁宣言となった。茅盾は回想録や『筆談』半月刊（1941年香港刊）の連載「客座雜憶」で張の「転向」を強く非難したが、自身の思想的变化には触れていない。
- (61) 前掲『我走過的道路』上冊153頁。
- (62) 生田頼孝「連省自治の「省際関係」」（『華南研究』1号、2014年4月）73頁。
- (63) P生「自治運動與社会革命」（『共産党』3号、1921年4月）『茅盾全集』14巻228頁。
- (64) 前掲「自治運動與社会革命」『茅盾全集』14巻229頁。
- (65) 前掲「自治運動與社会革命」『茅盾全集』14巻230頁。
- (66) 陳独秀「關於社会主義的討論」（『新青年』8巻4号、1920年12月）所収「東蓀先生『再答頌華兄』」に、「雁冰君謂抄近路或許可能、弟則以為抄近路絶不可能」とあり、茅盾が張東蓀に、革命には「近道がありうる」と話したことがわかる。白水紀子は、茅盾がこの言葉で張東蓀と袂を分かつたとする。前掲「沈雁冰（茅盾）の社会思想——五四時代」137頁。
- (67) 江春「社会革命底商榷」（『共産党』2号、1920年12月）。
- (68) レーニン「国家と革命」『レーニン全集』25巻（マルクス＝レーニン主義研究所・レーニン全集刊行委員会訳、大月書店、1957年）434頁。
- (69) 前掲「国家と革命」『レーニン全集』25巻445頁
- (70) 前掲「国家と革命」『レーニン全集』25巻444頁。
- (71) レーニン『国家と革命』第1部の翻訳に関連して、茅盾はこの語を使用している。前掲『我走過的道路』上冊、154頁。
- (72) <<https://bit.ly/3ZT0b2v>> [IA]。
- (73) 前掲「中国共産党成立史」77頁。なお、「加入第三次国際大会的条件」は、『茅盾訳文全集』、回想録『我走過的道路』、査国華・孫中田「茅盾著訳年表」（孫中田・査国華編『茅盾研究資料』下、中国社会科学出版社、1983年）のいずれにも記載がない。
- (74) 和訳全文は、村田陽一編訳『コミンテルン資料集』1巻（大月書店、1978年）所収。
- (75) 前掲『コミンテルン資料集』1巻と、『レーニン全集』31巻（マルクス＝レーニン主義研究所・レーニン全集刊行委員会訳、大月書店、1959年）所収の「加入条件」は、党の印刷・出版に関する条文が異なる。『レーニン全集』版には『コミンテルン資料集』所収版の第18条がなく、『コミンテルン資料集』所収版には『レーニン全集』版の第12条がない。『ネーション』版は両方とも収録し全22条とする。これは、レーニンの草稿とコミンテルン第2回大会を経て決定したバージョンが異なるためである。
- (76) <<https://bit.ly/3yFm7Th>> [ガリカ]。
- (77) フランス国立図書館電子版の1920年8～9月分を確認済。*Freiheit*は未見。
- (78) 前掲『コミンテルン資料集』1巻、569頁。
- (79) 「加入条件」冒頭で「第一回創立大会は、第三インタナショナルへの個々の党の加入を承認するための厳密な条件を作成」せず、「第一回大会が招集されたときには、大多数の国々には、共産主義的な傾向やグループしか存在していなかった」と述べている。『コミンテルン

資料集』1巻、214頁。

- (80) 当時の名称は、共産主義インターナショナル・フランス支部(Section française de l'Internationale communiste)。
- (81) 中共第2回大会(1922年7月)で可決した「中国共産党加入第三国際決議案」には、21ヵ条の加入条件を完全に承認し、中共がコミンテルン中国支部となることが明記された。中共中央文献研究室・中央档案馆編『建党以来重要文献選編(一九二一—一九四九)』第1冊(中央文献出版社、2011年)141頁。
- (82) 一例として、1926年11月のコミンテルン執行委員会総会決議は、中共に「非資本主義の路を行く」と同時に「国共合作の貫徹」を求めた。中共の対応については、緒形康『危機のディスクール——中国革命1926=1929』(新評論、1995年)118-169頁に詳しい。
- (83) 許紀霖「五四知識分子通向列寧主義之路(1919-1921)」(『清華大学学报(哲学社会科学版)』2020年5期)130頁。
- (84) 前掲「五四知識分子通向列寧主義之路(1919-1921)」130頁。
- (85) コミンテルン第2回大会で採択された「プロレタリア革命における共産党の役割についてのテーゼ」は、民主集中制の原則を「上級細胞が下級細胞によって選挙されること、上級細胞のすべての指令が下級細胞を絶対的に拘束すること、党大会と党大会との中間の時期に、すべての指導的党同志にたいして争う余地のない権威をもつ、権能ある党中央部が存在すること」とする。前掲『コミンテルン資料集』1巻212頁。
- (86) 前掲「五四運動與青年們底思想」『茅盾全集』14巻343頁。
- (87) 本稿引用部も「信仰」は「信奉」と訳した。
- (88) Russell, Bertrand. *The practice and theory of Bolshevism*. London: Allen. 1920. p.17. <<https://bit.ly/3MvR98i>> [IA]。引用は、バートランド・ラッセル『ロシア共産主義』(河合秀和訳、みすず書房、1990年)17頁より。
- (89) Russell, Bertrand (1920), *op.cit.*, pp.175-176. <<https://bit.ly/3zR28RT>> [IA]。引用は、前掲『ロシア共産主義』124頁より。
- (90) Russell, Bertrand. *The Problem of China*. London: Allen. 1922. pp.81-82. <<https://bit.ly/3Mx2J32>> [IA]。引用は、ラッセル『中国の問題』(牧野力訳、理想社、1971年)94頁より。